

低年齢向け e-Learning 教材提示方法の検討

005089 小宮山 美緒
(指導教員 速水 治夫 教授)

1. はじめに

e-Learning の普及と情報教育の重要化という 2 つの背景が合わさり、e-Learning を使用する対象の低年齢化が進行している。しかし、現在市場に出ている e-Learning システムは高校生から社会人を対象にしたもののばかりである。

そこで、小学校低学年を対象とした e-Learning システムを構築することにした。本研究ではその前提として、低年齢向けとは具体的にどのようなことなのかを仮定し、それが正しいかどうかを検討することにした。

2. 研究の概要

実施した検証項目は大きく分けて 4 つある。

(1) メニュー選択画面の構成

文字による説明が多くあるものより、記号や図を用いて内容を表現してあるメニューの方がわかりやすいという仮定の検証。

(2-1) 色に関する問題表示の方法

多色を使って華やかにするより、少ない色数でまとまりのある画面にしたほうがよいという仮定の検証。

(2-2) 構造に関する問題表示の方法

図やイラストを使って賑やかさや面白さをだすより、単純な構成で読みやすさを重視したほうがよいという仮定の検証。

(3) 数字を解答する方法

マウスを使用して 0 から 9 までの数字を

クリックして解答するより、10 キーを使用して解答する方法の方がよいという仮定の検証。

(4) 掲示板の形式

与えられた質問やテーマに対して生徒が書き込む生徒受身型の掲示板より、自由意志で書き込むことができる生徒主体型の掲示板の方がよいという仮定の検証。

仮定の例と相対する例の 2 つを示し、どちらの方がより学習意欲が湧くかを選択してもらった。実際の小学校 1~2 年生 142 名に協力してもらい、検証結果を得ることができた。

3. 結果

低年齢向けと明確に判断できる提示方法を得ることはできなかった。低年齢児童はそれぞれ自分のやり方・好みがあり、違った方法に適応することが難しいということが理由として考えられる。家庭や学校の環境が、児童の好む環境に大きく影響していると思われる。

4. まとめ

低年齢向け e-Learning では提示方法を含め、教育形式の理想と同じ一体一の学習環境が求められる。学校教育では行うことができない一体一の教育を 擬似一体一というスタイルを導入して補完するのが低年齢向け e-Learning の目標・課題となると思われる。